

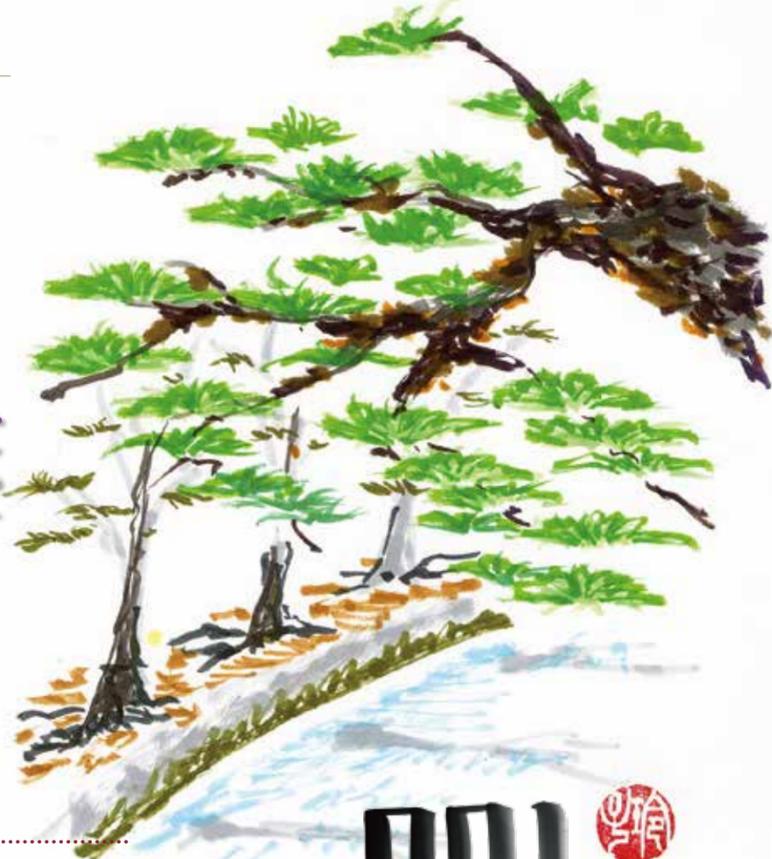
●「SHINWA WALK～伝説ぞろ歩き」は、「ギリシャ神話と日本神話のハイブリッド」という手法で、郷土の神話、伝説、民話の足跡をたどるロマン紀行です。新しい伝説の世界をお楽しみください。

SHINWA WALK 36

松風の里伝説

伝説
ぞろ歩き

正覚寺
風に吹かれて
時の旅
瞳閉じれば
松風の里



往時の名所跡に佇んで

しばし楽しむ時間旅行

正覚寺は浄土宗の寺院で、山号は亀足山。これは井戸の底から亀が足を出したことが由来しているといわれています。かつては境内の近くに精進川が流れ、東には鈴之御前社(通称・鈴の宮)がありました。

鈴之御前社の祭神は、天鈿女命で、6月晦日に夏越しの祓が川岸で行われていました。これは、参詣者に茅の輪をくぐらせて祓い清めるというもので、多くの人を訪れたといわれています。

精進川は、千種の今池を源に、御器所、高田、大喜など現在の昭和区、瑞穂区を抜けて南下した後、熱田の正覚寺の東北裏廻りで大きく西に曲がり、伝馬町に抜けていました。その正覚寺の裏廻りには見上げるような松の巨木が数本そびえ立っていて、「松風の里」と呼ばれ、絶景とされていました。

延宝6年(1678年)に編纂された熱田最古の地誌『厚覧草』には「松風の里は正覚寺の辺」とあり、元禄12年(1699年)の熱田町旧記にも「正覚寺の北の辺を松風の里」とあります。尾張名所図絵にも「夫木抄をは

じめ、藻塩草、松葉集などに、松風の里を尾張の名所とす」と記されています。尾張名所図絵は江戸時代末期から明治初期にかけて刊行されたもので、尾張の名勝、史跡、神社仏閣などを絵と分かりやすい文章で説明している地誌で、今でいうガイドブックです。

しかし、大正15年(1926年)、精進川は埋立工事のため跡形もなくなってしまい近くの裁断橋も廃止となっています。松風の里も、おそらくその頃になくなったものと思われれます。

正覚寺を訪ねて、かつて広がっていたであろう「松風の里」の風景に思いを馳せ、一陣の風に吹かれながら瞳を閉じて、ちょっとした時間旅行を楽しんでみるのも一興です。



▲かつて正覚寺の東側にあった鈴之御前社は、今は裁断橋の西側に移設されている。



ギリシャ神話のルーツは ホメロスとヘシオドスの叙事詩

伝説の名所が書物となって後世にまで伝えられていたという話でしたが、ギリシャ神話は、紀元前8世紀後半に盲目の詩人・ホメロスが作ったとされる二大叙事詩『イリアス』と『オデュッセイア』、そして紀元前8世紀末から7世紀初めに活躍したヘシオドスが書いたとされる二大叙事詩『神統記』と『仕事と日々』が原典といわれています。

イリアスには、今のトルコの北西海岸の近くで非常に栄えていたトロイアという町を、ギリシャから大軍を率いて遠征してきた英雄たちが、10年続いた戦いの末に攻略、完全に破壊したという「トロイア戦争」の話が物語られています。

また、オデュッセイアには、その戦争でギリシャ軍が勝つために、有名なトロイアの木馬の計略を考えることで最も大きな貢献をした、オデュッセウスという知恵者の英雄の話が描かれています。戦争が終わり、トロイアを出発してから、祖国イタケに帰り着いて、王位とペネロベという貞淑な妻を自分の手に取り戻すまで、10年間という歲月

の中で起きたさまざまな不思議な冒険のことが語られています。

神統記には、トロイア戦争以外のギリシャ神話の骨格となる部分について書かれています。仕事と日々は、農夫に対する教訓について記されていますが、その前書きとしてパンドラの話をはじめ、いくつかの重要な神話が語られています。

そしてこの4つの叙事詩をもとに、1世紀頃にアポロドロスがギリシャ神話・伝説を整理し、全体のあらすじを要約した概説書『神話』を完成させ、今日に伝えられています。



※次回は夜寒の里伝説について特集します。お楽しみに。

- 写真/Kiyoshi K
- イラスト/Rei
- 取材・文/Icarus



▲この正覚寺の裏手には、かつて「松風の里」という絶景があったとされている。